




シャンダイア物語

～打ち捨てられた都～

福田 弘生

Anima Soraris



第一章

旅芸人の詩

その小さな村に旅芸人の一座がやって来たのは、北国の短い夏の盛りの事だった。北の将として恐れられた老将ライバーがシャンダイア軍に滅ぼされ、残された要塞にはサルパートの聖王マキアの軍が入って赤い旗をなびかせた。そしてその冷たい建物が赤の要塞と呼ばれ出した頃から、風変わりな旅芸人の一座の噂がソントール大陸の北部に流れ始めた。

ソントール大陸の中央に巨大な壁のようにそそり立つ大陸を南北に分けているランスタイン大山脈の北側にあたる地方は、二千五百年前まで月光の将と呼ばれたソントールの将とシャンダイアのバルトール王国が対峙していた地域で、バルトール滅亡後は北の将とソントール本国が分け合って統治していた。だが今ではその北の将もいない。

北国の夏の緑は優しい色をして人々を暖める。旅芸人の一座はまだらになった木漏れ日を浴びながら細いボコボコした道を辿り、旅の途中で集めたらしい花びらと木の葉をまき散らしながら壊れた村の入り口の門をくぐった。

昼下がり。旅芸人の来訪にいち早く気が付いた目ざとい子供達が興味深く見つめる中で、一座は村の中央広場に小さな天幕の囲いを作った。そして囲いが出来上がると一行八人と一頭の馬はその幕の中に入って行った。それを見た子供達が親の袖を引き、大人達がささやきあって、噂を聞き付けた村人達が徐々に広場に集まって来た。やがて二十

人程の人が集まってようやく人声がザワザワとするようになってきた頃、天幕の中から腕をむき出しにして、体にぴったりした衣装に着替えた四人の男が出て来た。

一座の出し物はその四人の男達によるジャグリングから始まった。大柄な男と中背の男、それに小柄な男二人が乾いた木の実に棒を刺した三本のクラブを器用に投げ合った。やがて小柄な一人が大柄な男の背中に乗って三点の投げ合いになり、天幕から少年が老いた馬を引いて出てくると、小柄なもう一人の男が馬の背に立って大柄な男の周りに円を描きながら走り回ってクラブを投げ合った。やがて、少年がもう二本のクラブを投げて五本のクラブの投げ合いになると、村人達は大喜びで喝采を送った。

次の出し物は馬を引いて来た少年によるアクロバットだった。先ほどの背丈が同じくらいの小柄な男二人が向き合って立ち、その肩と肩の間に幅五十センチ、長さ三メートル程の板が渡された。少年は良くしなうその板の上でジャンプを繰り返すと、高々と舞って空中で見事に回転をした。次に大柄な男が三メートル程の長さの太い丸太を持って来ると、少年は丸太のてっぺんに片手で逆立ちして器用にバランスを取った。

この頃になると話を聞きつけた人々が集まって来て、小さな広場は村人でいっぱいになった。年に一度の収穫祭以外に楽しみの無い村人達は、農作業の手を休めてでもやっ

て来たのだ。やがて少年の演技が終わると、五人は深々と礼をして、丸太を持った男を残して他の四人は天幕に戻った。次に出てきたのは小柄で目つきが鋭く頬に深い傷がある男だった。男は丸太を持った男と五メートルくらい離れた所で向き合って立った。大男が丸太を体の前で構えると、頬に傷のある男は目にも止まらぬ早さで五本の短剣を丸太目にかけて投げ付けた。短剣はすべて大男の顔の前の丸太に見事に突き刺さった。息を殺して見守っていた村人達はホツとしたような顔で、パラパラと拍手をした。おだやかな田舎の村人にはこの芸は刺激が強過ぎたのだ。頬に傷のある男は村人のおびえたような反応を見て早々に引つ込んだ。続いて登場したのは、年齢がわからないくらいに年老いた老人だった。灰色の鰐広の尖り帽子と黒の長いローブも、着ている主人と同じようにしわくちゃになっている。老人は村人に一礼すると、大げさな身振りで帽子を取った。すると何も無いと思われた帽子の中には、赤や黄色や白等の色とりどりの花がいっぱい詰まっていた。老人は村人の中に子供の姿を見付けるとその花を手盛って配って歩いた。花と一緒に棒の先に砂糖を固めたお菓子も配られていたが、賢い子供達はもううなりきちんと服の中に隠した。老人はニヤニヤしながら広場の中央に戻ると両手を高々と掲げて手の平を天に向けた。すると何も無い手の平の上から黄色と赤の火花が上がった。村人達はその美しさに目を

瞠って歓声を上げた。老人はさらに体のあちこちから火花を上げて皆を喜ばせた。どうやらこういう派手な仕掛けが大好きらしかった。

村人達はこの派手な手品で出し物はすべて終わりだと思つた。事実、それは充分な程の見せ物だった。しかし一座にはもう一人とっておきの役者が残っていたのだ。その長身瘦躯の男が天幕から現れた時、村人はまず男が盲目な事に驚いた。憂いに満ちた顔には深い皺が刻まれているが肌にははりがあり、年齢は壮年に差しかかったばかりのように見える。しかし髪はすでに銀色になって細い顔を薄く縁取っていた。男はゆっくりと観衆の前に立つと、胸に手を当てて歌い始めた。その声は高く低く巧みに操られ、決してかすれる事は無かった。そして何より驚く程に美しかった。やがて歌が終わった後、茫然としている村人のどこかからカシ・カシユウだという声がささやかれた。しかし多くの村人達は首を振った。サシ・カシユウは伝説的な吟遊詩人で、こんな田舎周りの旅芸人の一座に混じっているはずが無いのだ。小さな村の広場は鳴り止まない拍手で満たされた。村人達はこの素晴らしい一座に心付けを与えなかったが、残念ながら皆お金を持っていかなかった。とまどう村人の中から村長が進み出て、座長らしい老人に話しかけようとしたが、老人は手を振ってそれを止めた。

「村の方々、私達にお金は要りません。一夜の宿と食事を。

ただそれだけでけっこうでございます」

村外れの農家の納屋を借りて一夜を過ごした一座は、翌朝早く村の人々に別れを告げて出発した。名残惜しげに見送る村人達が、村の入り口の木に黄色の布が巻き付けられているのに気付いたのはずっと後の事だった。

その日も天気は良く一行の行程はかなりはかどった。陽が高く昇った頃、先頭を進んでいたマルヴェスターが休憩を告げた。ベリックは赤い帽子を脱ぐとクシヤクシヤにして握り、道端の林の中を流れる小川に向かった。そして川に着くと夢中で水に手を突っ込んだ。

「ああ、冷たい」

水は痛いくらいに冷たかった。ベリックは水面に映る自分の顔を見つめた。

(僕はどうしてここにいるのだろうか)

カインザーで助け出されてからしばらくの間、ベリックは自分がなぜドラティの洞窟にいたのか思い出せない状態だった。その後、戦いに次ぐ戦いをくぐり抜けたが、その間は落ち着いて自分の生い立ちについて考える暇すら無かった。北の将の要塞が落ちてから約二ヶ月の間に、ベリックはようやく色々な事を思い出す時間を持つ事が出来たのだ。

(二年前、僕をカインザーに運んだ船は、海賊王ドン・サ

ントスの船団に守られていた)

その頃ベリックは、サントスの大きな船に時々遊びに行った。立派な軍服に身を包んで葉巻をくわえたサントスには中々近付きにくかったが、ベズスレンという派手な衣装のにぎやかな男と、シャクラという寡黙な魔法使いがいつも相手をしてくれた。二人はサントスの幹部だったが、どういうわけかベリックを可愛がってくれたのだ。あるいはベリックの正体について何かを察していたのかもしれない。海賊の王のサントスより、むしろ細かい事に気が付いたのだろう。あの二人にもう一度会って、自分の事をどう思っていたのか聞いてみたいとベリックは思った。

やがてサントスの船団は、カインザー大陸中央部のケマール川河口付近の小さな港に着いた。そこでマスター・メソルの部下はベリックを一人の長身で総髪 of 男にあずけた。メソルの部下達がベリックの正体を知っていたという事は無いだろう。だが、

(あの男は知っていたはずだ。超然とした、得体の知れない男。しかし邪悪な感じは受けなかった)

「ベリック様」

ベリックはフスツの呼ぶ声で我に返った。ベリックの片腕であるフスツは、王の後ろに心配そうな顔で立っていた。

「ああ、ごめん。すぐに戻る」

フスツは声をひそめた。

「ここはすでにマサズの支配地域です。旅芸人の一座のふりをすればソントール軍には怪しまれないでしょうが、マサズの手下にはむしろこれみよがしに姿を見せながら旅をしているようなものになります。マルヴェスター様は何を考えているのでしょうか」

「僕も最初はもつと早くロググに向かうのかと思っていた。でも、これでいいと思う」

「そう、ですか。王がそうおっしゃるのならば」

フスツは納得がいかないようだった。だが賢いベリックは悟っていた。

（マルヴェスター様は、僕を待っているのだ。僕が記憶を整理して、バルトールの風土を知って、マサズと対決する心の準備が出来るのを待っているのだ）

ベリックは立ち上がると、手を振って水を切りながら皆の元に戻った。フスツが連れて来た四人の部下がホツとした表情で王を迎えた。ベリックは男達を見回した。ビンネという名の色白の男は、バルトール人には珍しい巨漢で怪力の持ち主だった。中背のクラウロはどこと言って特徴の無いバルトール人の典型で、この地域のどこの村に行っても簡単に村人に溶け込んでしまえる。背の低いバヤンはあらゆる薬物に長じており、トリロは見事な料理の腕前を持っていた。

フスツは太い倒木に腰掛けているビンネとクラウロの間

に座った。トリロはバヤンに手伝わせて昼食の用意をしている。ベリックはフスツの正面に腰を降ろした。普段は、盲目のふりを続けているサシ・カシユウは年老いた愛馬の体を藁の束でこすっている。馬の周りを無数の夏の虫が飛んでいた。

バヤンが沸かしたお茶を皆に配った。サシは馬の横でそれを受け取って静かにすすると、ぶつぶつぶやきながら歩き回っているマルヴェスターに話しかけた。

「現在のバルトールの最大勢力。マスター議会の議長マサズとはどんな男ですか」

これには噛んでいた煙草を吐き捨ててフスツが答えた。「マサズは邪悪な老人だ。あらゆる快樂におぼれて墮落した。そして思い上がってバルトールの心を失い、自らが王になろうと画策している」

サシも草の上に腰を降ろした。

「なる程。そのマサズを支持しているマスターは誰ですか」
フスツはお茶のカップを両手で持ってその香りを嗅いだ。「いないはずだ。俺は一時期メソルがマサズの手先かと思っていた時があるが、どうやら違うらしい。だがマサズは一人で充分な力を持っている」

マルヴェスターも足を止めて顔をしかめた。

「うむ、マサズは難物だな。今、ベリックを支持しているバルトールマスターはサルパートのモント。セントーンの

リケル。ユマールのケイフ。そしてカインザーのアントか」
そこでマルヴェスターは言葉を切ってベリックを見た。

「アントンとは思いつた指名だったな」

ベリックは楽しそうに笑った。

「すぐれたマスターになるはずです」

マルヴェスターは手をヒラヒラと振ってニヤリとした。

「かもしれない。レドが知ったら驚くだろうがな。さてと、この四人のマスターにザイマンのメソルが加わったとしても、マサズを敵にまわしたらその財力と組織の大きさにはかなり手を焼くはずだ」

フスツが頭を振った。

「むしろ相手にならないと言ったほうが良いでしょう。メソルはどこにいるのかさえわかりません。モントは老人、アントはカインザー人でまだ着任したばかり。ケイフは遠く、リケルはソントール軍の包囲の中にいます。せめて口トフ様が生きていれば」

ベリックは西の将の要塞で最初に自分にひざまずいた子供のよ様な顔をした男を思い出した。トリロが蒸かした穀物をお椀に入れて皆に配った。お腕を受け取ってフスツが続けた。

「マサズも危険だが、我々が直接相手にする危険はイサシかもしれない」

ベリックがたずねた。

「マサズとイサシって、北の将ライバーと黒い短剣の魔法使いギルゾンのような関係なの」

「少し似ています。マサズはロググに構えて動かず、もっぱらイサシが各地を駆け回って様々な事を画策している。ただイサシはギルゾンよりも複雑な駆け引きをする男です。そして何よりマサズとライバーとの大きな違いは、マサズは歳をとつても権力や快楽に異様に固執している事です」

ベリックはジンネマンの大洞窟を出た後、イサシと会つた時の事を思い出した。危険極まりない男である事はすぐに察しが付いたが、単なるマサズの手先では無さそうだ。イサシはイサシの目的で動いているような感じを受けた。食事を口に入れたベリックは明るい顔をして微笑んだ。

「僕らはマサズと戦いに行くのじゃ無い。僕らの目的はまづロググのバルトールマスターと話し合い、バルトールをまとめてサルパートと共にもう一度北を守る事なのだ。それに」

ベリックが胸をはった。

「バルトールマスターはもう一人いる」

サシ・カシユウがお茶をすすって顔を上げた。

「グラン・エルバ・ソントールのマスターですね」

フスツの顔が青白くなった。

「ジザレ。この男がマサズについてベリック様に敵対したら、残念ながらバルトールの大半はシャランダア連合から

「離れるでしょう」

「ならば、どうしても両方を味方にしよう」

ベリックは少年らしい期待を込めてそう言った。フスツが立ったまま食事をしているマルヴェスターを見上げた。

「ロググはまだまだ遠い。先を急ぎましょう」

マルヴェスターは口をモグモグさせながら答えた。

「いや、ベリックが王であるならば、会わなければならぬ者達がいる」

フスツが蒼白になった。

「いけません」

ベリックがたずねた。

「誰に会うのですか」

「ここから北に行くと広大な荒れ地がある。そこがバリヤノギワキと呼ばれる古戦場だ」

「古戦場。そこでは誰と誰が戦ったのですか」

サシ・カシユウが腕を膝の上に置いて、記憶を探るように話し始めた。

「ロググを落とし、バルトールを制圧したソントールの将は月光の将と呼ばれていました。月はバステラ神が最後に創った創造物です。ソントール本国に最も近い将にこの月の旗印が与えられていたのです。月光の将はその後セントーンに攻め込みましたが、攻略出来ずにユマール大陸に渡りました。月光の将の軍がいなくなったその時に、旧バル

トールの貴族達が決起したのです。旧都ログ近郊で旗揚げした貴族達の軍は次第に勢力を強めて、一時はバルトールを復興させるかと思われる程の勢いでした。しかし西から進軍して来た北の将の軍とバリヤノギワキで戦い、敗れました」

ベリックはこの話を初めて聞いた。

「貴族達を率いていたのは誰」

「ボック公爵。バルトール王家最後の家の当主だったが、バリヤノギワキで敗北した後、ログに残した妻と子供は北の将の兵に惨殺されました」

サシ・カシユウは立ち上がってベリックに歩み寄ると、その肩に手を置いた。

「バリヤノギワキの古戦場では今も剣撃の響きが絶えないと言われています。あなたが静めなければ、彼らは永遠に戦い続けるでしょう」

「戦っているって、誰と」

マルヴェスターが言った。

「バルトール人は激情の民だ、そうすんなりとは敗戦を認める事が出来なかったのだ。死してなお、自らの心が作り出した幻の敵と戦い続けている」

フスツは訴えた。

「おやめください。バリヤノギワキに今この時期に行く必要はありません。ボック公爵達の霊を静めるのはバルトール

ルを統一して、バリオラ神を探しだしてからからしかるべく準備をして行けば良い事。ポックの霊は狂っているとさえ言われております」

だがベリックは首を振った。

「行こう。一日も早く僕が帰ってきた事を伝えて、バルトールの復興を約束してポック公爵に眠りについてもらおうだ」

サシが険しい表情で言った。

「死者との約束は重いですよ」

「わかっているよ。でも行こう」

ベリックはそう言っつて北の空を見上げた。

グラン・エルバ・ソントールの王宮。巨大な六角形をした尖塔型の建築物の中央にある謁見の間に、かつて西の将と呼ばれたマコーキンは立った。この王宮の壮麗さはおかつての西の将の要塞など足下にも及ばないが、久々に戻ったマコーキンも一年の間にすっかり見慣れてしまった。かつては夜の公子とうたわれた背高く整った顔立ちの若き将軍は今日も黒い衣装に身を包んでいるが、その下の獣のようになやかな筋肉は隠しようが無い。その筋肉を流れるように動かして、林のように立ち並ぶ兵達の間を進んだマコーキンが謁見の間に入った時、玉座の階段の上に皇帝はいなかった。その宝石に包まれた巨大な玉座の下の向かつて

右にハルバルト元帥が、左に魔法使いガザヴォツクの二大老が立っていた。マコーキンはゆっくりと歩を進めた。ソントール帝国にはこの二人と同格の人物がもう一人いる。しかしそのゼイバーという名の海軍提督はエルバナ湖に浮かぶ湖上要塞に籠っていて、めったに首都には顔を見せなかった。金糸の刺繍を施した豪華な軍服を着たハルバルトが口を開いた。

「マコーキン。ガザヴォツク殿のお口添えもあって、そなたの罪は許された」

マコーキンは胸に右手を当てて二人に向かって頭を下げた。

「要塞を失い、ゾノボート殿を死なせた私に寛大な処置をくださいまして、感謝に堪えません」

ガザヴォツクの思慮深い顔には、何を考えているのか表情は映らない。魔法使いは驚くほどに落ち着いた声で言った。

「ハルバルト元帥はそなたをすぐに戦場に戻したいとおっしゃっている。しかし、そなたの武勇を見込んで特に頼みがある」

マコーキンがハルバルトに目を向けると、元帥は渋い顔をした。

「わしは、ただちにポイントポート攻略に向かって欲しかったのだ。だが、ガザヴォツク殿にもお考えがあるらしい」

「ガザヴォック様。私に出来る事でしたらば、力の限りお役に立たせていただきます」

「うむ。ここから北東、ランスタイン山脈を越えた向こう側にクリルカンという峠がある」

マコーキンはうなずいた。

「昔のバルトール領ですね」

「そうだ。その峠に一匹の鬼がいる」

マコーキンは耳を疑った。

「鬼、ですか」

「ザークだ」

「何と、伝説の大鬼ザークがまだ生きていますか」

「そうだ。月光の将がユマールに渡る時に解き放った。その鬼を捕まえて来て欲しい」

ハルバルトが唸った。

「ガザヴォック殿。マコーキンは大軍を指揮してこそその将だ。ライバーが死に、グルタス・ゼンダが戦死してその郎党が散々に敗れて逃げ帰ってきているこの時期、必要なのは強い將軍だ。なぜ鬼を捕まえるためにマコーキンを送り出さねばならんのだ。他の者ではいかんのか」

長身の魔法使いは左手の人さし指を立てた。

「ザークは現在までに生き残っている太古の生物の中で、最も不思議な力を持つ最も危険な怪物。マコーキン殿の類いまれな知力と判断力と剣の技をもってしなければあの鬼

は捕まらん」

ハルバルトは太い腕を組んだ。

「捕まえて何となさる」

「皇帝陛下の守護獣となす」

マコーキンはうなずいた。

「ならば参りましょう。兵はいかほど連れて行ってよろしいでしょうか」

ガザヴォックがマコーキンを見つめた。

「兵の数は問題にはならん。必要なのはそなたの持つ力だ」

そう言つてガザヴォックは右手を宙で振ると、空間から細い鎖を引き出してマコーキンに手渡した。

「かつてサルパートの狼バイオンを繋いでいた鎖だ。ザークを見付けたら投げつければ良い。後はわしが繋ぎ止める」

マコーキンは鎖を手にしたはずんだ。

(不思議な使命を命じられたものだ)

そのマコーキンを見て、ガザヴォックがもう一つの鎖を宙から取り出した。マコーキンは首をかしげた。

「それは」

「褒美を先に渡しておこう」

「褒美ですか」

「グルバの要塞のデルメッツを繋いでいた鎖をザラツカが返してよこした。左手を」

マコーキンは先ほど受け取った鎖を右手にして、左手を

魔法使いに差し出した。ガザヴォックがマコーキンの手に鎖を落とすと、一瞬赤く光ってマコーキンの手に繋がるかのように見えた。しかしその光はすぐに消えて元の冴え冴えとした鎖に戻ってマコーキンの手の中に収まった。ガザヴォックが説明した。

「これはそなたが繋ぎ止めたいと思った者に使うが良い。そなたの心で相手を操れる」

「なぜこのような魔法を私に」

ここで初めてガザヴォックが恐ろしい微笑みを浮かべた。「この魔法は他の魔法使い達にも渡していない。だが何かがおそなたの行く手に待っておる。わしの勘がそれを告げているのだ」

マコーキンはそれ以上何も問わずに二つの鎖を服のポケットに入れると謁見の間を後にした。外ではかつての西の将の参謀であり、今でもマコーキンを支えてくれている参謀のバーンが待っていた。

中肉中背の特に特徴の無い容姿の男だが、さすがに家柄の高さか、豪勢な服を着ると貫録がある。

「マコーキン様、どちらに参られます。ポイントポートですか、それともセントーンですか」

「いや、ランスタインの向こう側だ」

バーンはちよつと意外と言った顔をした。

「何と、昔の月光の将の要塞を復興させますか」

「いや、違うらしい。鬼を」

「鬼、ですか」

「ああ、ザークを捕えに行く」

二人はゆつくりと天井の高い廊下を歩き出した。窓から明るい光が縞模様様に廊下を照らしている。

「意外な話でございますな。なぜ鬼を一匹捕まえるためにマコーキン様程の將軍を使うのか」

「俺もちよつと残念だ。ポイントポートのトルソンを打ち破つて、要塞で死んだキアニスの仇を取ってやろうと思つていたのだが」

「どういたします」

マコーキンはポケットに手を突っ込んで、鎖を掴んだ。

「どうやら俺一人で行つても良いらしい。君は必要とされている戦場がたくさんあるはずだ」

「残念ながらそうでもありません。と言うか、仕えたい将がマコーキン様以外にございません」

「ならば政治の世界があるだろう」

「それも私の性にありません」

二人は立ち止まった。

「俺は行くよ」

マコーキンはポツリとそう言つてバーンを残して歩み去つた。バーンはじつとその後ろ姿を見送つた。

翌朝、自分の家の兵のみを引き連れたマコーキンがグラ

ン・エルバ・ソントールの巨大な北の門に差しかかると、そこには馬に乗った二人の男が門の下で待っていた。

マコーキンが馬を止めると、門の影の中から、背の低い方の男が進み出て来た。身軽な皮の上着に鏝無しの茶色の中折れ帽子。マコーキンはその姿の懐かしさに思わず声を上げた。

「バーン」

涼やかな笑顔のバーンが答えた。

「山越えもまた良いでしょう」

続いて真っ赤な鎧に派手な鷲の羽飾りの兜をかぶった色白の大男が、バーンの隣に軍馬を進めて来て笑った。

「東の将と喧嘩をして追い出されて来ました」

マコーキンは苦笑した。

「バルツコワ。つつしんだ方が良いぞ」

「仕方ありません。東の将キルティアはある意味化け物だ。俺とは相性が合いません」

バーンが手を振ると、二人の後ろに黒い鎧の兵が続々と姿を現わして整列した。バーンが説明した。

「ハルバルト様のお言葉です。月光の将の要塞の掃除をしてこいと」

マコーキンは笑った。

「よし、行こう。だがこの人数で山は越せんぞ」

「大丈夫です。ここから少し西に進み、そこから北進すれ

ば、ランスタインの一番低い尾根を越えられます。昔は月光の将の要塞への街道すらありました」

バルツコワが兵士から旗を受け取って高々と掲げた。黒の地に銀の竜が刺繍された将旗がふたたびひるがえった。これがマコーキンの果てしなく続く戦いの運命への出撃だった。そしてガザヴォツクから渡された二つの鎖がいくつかの運命を繋ぎ止める事になる。その中には黒髪の美しい魔術師の運命も含まれている事を、この時点ではガザヴォツクですら予測していなかった。

途中の村で馬を購入したベリック達が踏み込んだバリヤノギワキへの道は、道と呼ぶには広過ぎる何も無い荒野だった。すでに雪は無かったが、白く乾いた大地は時折雪原のようにさえ見えた。風はひんやりしていたが、海が近くに連れて次第に暖かさが増してきて、旅には快適な気候だった。サシ・カシユウがマルヴェスターに話しかけた。

「さすがに夏だとこの地方も暖かいですね」

「海が近いとなぜか暖かいものなのだ。まあバリオラ神は元々にぎやかな神だったので、寒いのは嫌いなんだろう」

ベリックは豊富な知識を持つサシ・カシユウとマルヴェスターが、この旅の中で色々な事を自分に教えようとしている事に気付いていた。サシ・カシユウが続けた。

「老師はこの三千年の間、様々な使命を抱えてこられたの

ですね」

マルヴェエスターが苦笑いした。

「あまりにもたくさんだ。なにせシャンダイアの王と王子は手のかかる奴が多いからな。王女に至っては、わしの手にはすら負えん。ミリアとセリスがマルトン神に仕えたおかげで、セントーンをミリアに。ザイマンをセリスにまかせたはずだったのだが」

マルヴェエスターはそこでため息をついた。

「セリスには早過ぎたなあ」

ベリックがたずねた。

「セルダン王子達が探しに行った、マルトン神のもう一人の弟子って誰ですか」

「ふむ。トーム・ザンプタと言う名だ。セルダン達がうまく見付け出してくれれば、そのうち会えるだろう。ロググが陥落した時にロググの見張りをしていたのだが、ガザヴオツクの侵入を許してしまった。侵入したガザヴオツクは策略を使ってバリオラ神に神酒を飲ませ、酔った女神が踊りに我を忘れている間に首都ロググを陥落させた。その後、ザンプタはマルトン神の元を去った」

少し後ろに馬を進めていたフスツが厳しい声で追うように言った。

「ザンプタという方には、一度会わねばなりませんな」

「責めるな。彼には翼の神の弟子の務めは無理だったのだ。

なぜか憧れに弱い生き物だった」

ベリックがその言葉に反応した。

「生き物ですか」

「人間では無いのだ。ホックノック族という海の精霊だ」

ベリックは素直に感嘆の声を上げた。

「驚いたなあ。僕の知らない生き物がたくさんいるんですね」

「そのうちに会える。皆にな」

フスツが馬を近付けてきた。

「我々バルトールの民は、あなたが助けに来ないからログが落ちたと信じてきました。なぜザンプタの事を我らにお話しにならなかったのですか」

「わしはある使命でログに戻るのが遅れ。わしがログに着いた時にはすでに都市は陥落の混乱のただ中だった。わしはバリオラ神が消滅したと思っていたのだ。その事をしかと確認するまで、バルトールの民に話す事が出来なかった。そうこうするうちにすっかり嫌われてしまったのだよ」

「陥落時にはいたのですか」

「おったよ」

「王や王子の行方は探したのですか」

「もちろんだ。だがどうやらひと足先に巫女達が王子を連れ出したのだろう。ボック公爵の決起の時にかつぎ出さな

かったのは懸命だった」

「その巫女達が、メソルおばさんに繋がるんですね」

「そうだ。マスター議会には代々巫女が一人おったから、その巫女が守ってきたのだろう。どうしてドラティの所におまえを送り込んだのかはわからん」

「それも会えばわかりますね」

マルヴェスターはニヤリとした。

「そうだ、歩いて、歩いて、そして多くの人に会うのだ。おまえは王なのだから」

ベリックは鞍に付けた箱の中に入れてあるピンク色の薔薇を思い出した。エレーデの薔薇だ。

(その前にエレーデにも会いたいな。これをエレーデに送る前にもう一度、会えるだろうか)

その時、突然身を切る程の冷たい風が吹いてきた。風は次第に強さを増したが、不思議な事に地面に土埃が立たなかった。ベリックが見上げると、空に黒い雲が湧き起り、黄色い光が明滅した。茫漠とした大地が一瞬、ゴンと揺れると、あつという間に剣と剣が叩き付けあう騒然とした響きに包まれた。マルヴェスター以外の七人が思わず耳を塞いだ。ベリックが叫んだ。

「これがボック公爵の軍ですか」

マルヴェスターが長い白髭をしごいた。

「そうだ」

剣の響きの次に聞こえて来たのは、大地を轟かす馬蹄の響きだった。闇が舞うように踊り、軍馬の群れがはるか彼方を疾走するのが見えた。その馬群の上には血まみれの鎧を着た男達がまたがっている。サシ・カシユウがつぶやいた。

「目を開くと、珍しい物が見えるものだ」

馬の群れは地響きをたててベリック達の周りを回ると、取り囲むように止まった。やがて三騎の鎧を着た戦士がベリック達に近付いてきた。中央の小柄ながらがっしりした体格の男がベリックを見てあえぐような声を上げた。

「王子、カベル王子、生きていらっしやっただですか」

フスツが進み出ようとするのをベリックが制した。

「僕はあなたの王子では無い。僕の名はベリック、バルトールの子だ」

中央の男は馬を降りた。その顔はどこかベリックに似ていた。

「王ですと、確かにアンザラ王はお亡くなりになった。あなたも王だ。カベル王だ」

マルヴェスターがベリックの後ろに立った。

「ボック、ここに居るのはベリック。カベル王子の遠い子孫だ」

ボック公爵はベリックを見つめた。ベリックがボックの目を見返した。

「あなたがここで北の将の軍と戦ってから二千五百年が経ちました。あなたの戦いはすでに終わったのです」

ボックは髪の毛を振り乱して叫んだ。

「嘘だ。戦いはまだ終わっていない。あなたはカベル王だ」

ベリックは凜とした声で説明した。

「シャンドアイアは戦い続けています。すでに西の将は退却し、北の将は滅ぼされました。今、南の将と戦うために、カインザーとザイマンの王子が南に向かっています」

ボックはドンドンと胸を叩いた。

「ならば戦おうでは無いか王。このままソントールに攻め込もう。我々が従いますぞ」

ベリックは首を振った。

「ボック公爵。これは僕の世代の戦いだ。あなた達はここで安らかに眠ってください」

「いやだ。戦う。俺達は戦う」

ボックの霊は、剣を抜くと高々と掲げた。ボックの兵が空気を切り裂くような甲高い雄叫びを上げた。

「黙れ」

ベリックが叫んでバザの短剣を抜いた。

「これは私の戦いだ。邪魔をする事は許さん」

ボックの軍勢に沈黙が降りた。

「おまえの眠るはずの世界に戻れボック。バルトールは私が必ず復興させる」

フスツ達は息を殺して成り行きを見守った。大地がグロングロンと唸り続けている。やがてポックは振り上げた剣をストーンと降ろした。そしてベリックの前にひざまずくと、頭をたれた。

「王、ご帰還をお待ち申し上げておりました。我らが無念、お晴らしくください」

「約束しよう」

ポックは馬にまたがると軍勢を率いて去って行った。その騎馬部隊の姿が遠くにかすれて消えると、突然空が晴れてあたりに静けさが戻った。マルヴェスターがベリックの肩を叩いた。

「見事だった」

ベリックは手に貼り付いたようになっていた短剣を引きはがして鞘に納めた。フスツが涙を流しながらベリックに言った。

「王、ありがとうございます。ポック公爵は我らがバルトール人の心の痛みだったのです」

「バルトール人の心の痛みは、僕の痛みだ。必ず、必ずバルトールを復興させる」

ベリックはポック公爵が去って行った北の彼方を一度眺めてから、東に目を移した。

「行こう、ロツグへ」

エレーデが通う智慧の峰の巫女を育てる学校の付近もさすがにこの季節には雪が消え、柔らかい木々の緑が美しく茂っていた。サシ・カシユウの姪、エレーデが花を手に窓を開けると、中庭に白い衣をまとった美しい少年が立っていた。エレーデの黒い瞳が真ん丸くなった。

「エイトリ様」

「驚かせてすまんな」

エレーデは少女らしい探るような目で、まじまじとエイトリを見つめた。

「少し大きくなりましたか」

知恵と医療の神は少し照れたように笑った。

「少しずつではあるが力が戻ってきている。美しい花だな」

「母に捧げています」

「すまぬな。あの頃、わしは無力であった」

エレーデは悲しげに目をふせた。

「死んだのは母ばかりではありません。多くの人が死にましました。そして父も」

「すまん、悲しい事を思い出させた」

エレーデは気丈そうな顔を上げた。

「エイトリ様、ベリック様はご無事でしょうか」

エイトリは首をかしげた。

「私の知覚の届く範囲はとても狭い。だが信じて待つが良い。その間そなたはここで勉強をして、馬と話す能力を磨

きなさい」

「この力はエイトリ様がくださったものだと言いました」

「サルパートの民は私の子供達。だが私でも誰にと意図してこの力を与える事は出来ない、そなたにこの力が与えられたのは何か別の力の意図があつたのだろう」

エレーデは難しい話に眉をひそめた。

「今は良い。やがて再びそなたの力が必要になる日が来る。健やかに育て娘よ」

「はい。皆様のご恩に報いるためにも」

エイトリは慈悲深く微笑むと姿を消した。

千里を見るかす目を持った鬼は、クリルカン峠の上から西を見た。そしてこの星の最初の狼バイオンが、ガザヴオツクの魔法で魂を引きちぎられて絶命するのを見た。しばらく前に死んだドラティに続いて古いなじみがまた姿を消してしまった。

そしてまたしばらくして、東と西から魔法の力を持つ者が近付いてくるのに気が付いた。より近いのは西からやってくる魔法だった。鬼はその魔法が自分の命を絶つてくれるかと期待したが、どうやらその小さい剣では自分の命は奪えないと知った。自分の命を絶つ事が出来るのは、東から海を越えてやってくる大剣のはずだが、その剣は一度大陸に立ち寄ると、南に向かって去って行ってしまった。

身の丈三十メートル、赤味が差した鉄色の肌。枯れ草のような色のボウボウとした髪。真っ赤な口、牙のように尖った歯、高い鼻梁に爛々と見開かれた巨大な目。腰にわずかな布を巻いただけの裸の鬼は咆哮しながら毎日峠をさまざつた。鬼の首からは太い縄が背中に向けて下げられていた。その先には鬼の巨体から見ればとても小さい棺が吊るさされている。棺の中には情熱的な彩りの衣装を来た美しい女性の姿があつた。しかしその顔は蒼白でまるで息をしていないかのようだった。

何者が自分にこの棺を背負わせたのか鬼は知らなかつた。だがその女の自分と相容れない存在が鬼に苦痛を与え続けた。それは棺の中の女にも苦しみを与えているはずだった。二千五百年の苦痛から鬼は逃れたかつた。

ある日、今度は巨大な鳥のデルメツツが珍しく北の方までやって来て、乗り手を降ろして南に去つた。その乗り手は奇妙な気配を漂わせていたが、破壊とはほど遠い感じも受けた。鬼はその者の存在を心に留めてまた徘徊を続けた。鬼の名はザークと言う。

(第二章に続く)

うちすてられたみやこ
打ち捨てられた都 —シャンダイア物語—

2002年6月8日 第1版第1刷発行

著者 福田 弘生 (Hiroo hukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電脳工房りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。

著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_l/chandaia/index.shtml